

〈論文〉

クントウル・ワシの墓

——ペルー北部山地の発掘調査から——

大 貫 良 夫 (東京大学)
加 藤 泰 建 (埼玉大学)

クントウル・ワシはペルー北部山地カハマルカ県にある遺跡で、アンデス先史学で形成期とよばれる時代に属する。東京大学古代アンデス文明調査団は、1988, 89, 90年の3ヵ年にわたって、この遺跡の発掘調査を行った。その際、遺跡中央の基壇部分で黄金製品その他の副葬品を伴う一連の墓が発見され、アンデス研究者の注目を集めた。以下の小論は、これら7基の墓の予備的な発掘報告である。人骨と遺物の分析などまだなすべきことが残っており、それらの作業が終了した時点で、あらためて詳細な報告を発表する予定である。

アンデス文化史における形成期とは土器が製作されるようになってから (BC 1800)、古代国家段階への移行が具体化した時期 (AD 100) までを指す。この形成期研究の主要な関心は、アンデスにおける国家形成の前段階として、いかなる社会変化・文化変化の過程が進行したかという問題にある。近年の研究では、この時期に各地に大規模な祭祀建築が出現していることが注目されており、小規模な村落社会を相互に結び付け、広域にまたがる地域社会が形成される契機としての祭祀の役割が重要な検討課題となってきた。形成期における祭祀の役割の解明、クントウル・ワシの発掘調査もまた、これを主たる課題としている。

遺 跡

クントゥル・ワシ遺跡は、カハマルカ県サン・パブロ郡プエブロ・ヌエボ地区にある。アンデス山脈の西斜面の尾根の突端、海拔2,200 mほどの山である。遺跡のある山の東側は急峻な斜面となってサン・パブロ川に落ち込んでいる。南西側もまた断崖に近い急斜面でサン・ミゲル川に落ち込む。一方、北西側には緩やかな斜面が広がり、現在は広々とした農地になっている。しかしこの緩斜面もやがては断崖になり、その先にはサン・ミゲル川の深い峡谷がある。サン・パブロ川とサン・ミゲル川はいずれもヘケテペケ川に合流し、太平洋へと流れてゆく。海岸からの距離はおよそ120キロメートルである。クントゥル・ワシから尾根をたどって約3キロメートルのところに、郡庁所在地でもあるサン・パブロ市があり、さらに山道をゆくか、あるいはヘケテペケ川に沿って上流にゆくかして、分水嶺を越えるとその先にカハマルカ盆地(海拔2,700 m)がある。クントゥル・ワシから直線距離にして約35キロメートルである。

遺跡は、段違いの2つのエプロン状テラスと頂上マウンドからなる。テラスは頂上マウンドの北東に尾根を整形して築かれており、高い方を第一テラス、低い方を第二テラスとよんでおく。第一テラスは幅130 mあまり、奥行き45 mで、第二テラスより6 mほど高く、これとのあいだに大石の土留壁が立ち、この壁の中央に幅11 mの階段があつて、2つのテラスをつないでいる。第二テラスは、奥行き30 mほどで、やはり北東の縁は石壁で支えてあり、中央部に階段がある模様である。第一テラスの奥に高さ9 mの頂上マウンドがある。四方は段違いの三重の石壁(土留壁)をめぐるし、北東面の中央に幅11 mの階段が設けられている。こうして、頂上マウンドは全体として一つの巨大な基壇であり、その上面は幅110 m、奥行き130 mの広さとなっている。

時期区分

現在、頂上マウンドの地表にはほとんど建築跡が見られない。およそ1ヘクタール余の広さの、あまり起伏のない平坦な状態になっている。しかし発掘調査の結果、土中にはかなり多くの建築が埋もれており、しかも多時期にわたる大規模な建設活動があったことが確認された。3回の調査により、クントゥル・ワシ遺跡は少なくとも4時期にわたって利用されていたことが明らかになった。これらの時期は大きな枠組みでいえば形成期に入る。したがって、クントゥル・ワシでは、形成期の中で生じた祭祀活動の変化を追求することができるのである。4時期への細分は、建築の重なりと、土器の層位関係とを基礎にして、総合的に検討したもので、古い方から、イドロ期、クントゥル・ワシ期、コパ期、ソテラ期の4時期である。

クントゥル・ワシで最初に祭祀建築が作られるのがイドロ期である。この時期の建築はクントゥル・ワシ期の建築によって完全に埋められてしまっているので、全貌を知ることが困難であるが、発掘によってイドロ期の地層にまで到達できた地点では、必ずといってよいほど、白土をかなりの厚さに固く敷き詰めた床面（その多くは人工の広場）が認められ、それに対応するいくつかの建築遺構を発見することができた。土器の特徴からすると、イドロ期は、カハマルカ盆地の後期ワカロマ期と共通する点が多い。

つぎのクントゥル・ワシ期においては、先行したイドロ期の建築を埋め尽くしたその上に、全く新しいプランによる祭祀建築が築かれた。現在の遺跡の外観はこの時期にできた構造が基礎になっている。頂上マウンドを支える大規模な外周壁と階段が作られ、北東側に2段のテラスが築かれた。階段をのぼりつめた頂上には1辺25mの方形の半地下式中央広場が設けられ、その両側に複雑な構造をもった大小の基壇建築と小型の広場が配置された。中央広場の正面奥には一段高くなった中央基壇がある。そこは頂

上マウンドのほぼ中心にあたる場所である。中央基壇のさらに背後の平坦部には円形の半地下式広場が作られた。直径約 15 m、深さ約 2 m、向かい合う位置に一对の階段が付いていたと考えられる。クントゥル・ワシ期の土器は、北海岸に広く分布するクビスニケ様式に酷似しており、海岸との密接な関係がうかがわれる。

つづくコパ期では、クントゥル・ワシ期の建築プランが部分的に踏襲された。中央基壇の北東側では、中央広場やその東の基壇の床の張り替えや、小さな建築の付加など、部分的な増改築があるものの、基本構造に大きな変化はない。これに対して、中央基壇より南西部では前面的な改変がなされている。円形半地下式広場は完全に埋められて、その上に新しいプランの建築が展開する。建築群の基本軸も変わり、それ以前までの北東—南西ではなくなっている。土器からみると、カハマルカ盆地の EL 相との類似が最も強い。

ソテラ期はクントゥル・ワシにおける最後の時期である。この時に祭祀建築は徹底的な破壊を被っている。土器はカハマルカ盆地のライソン期のもと同じで、カハマルカ盆地でもライソン期にそれ以前の祭祀建築の大規模な破壊活動が認められている。

墓の発掘

特殊な一連の墓は、頂上マウンドのほぼ中央部（A地区）で発見された。ここには、幅 24.8 m、奥行き 15.7 m、高さ 1.5 m の中央基壇(KW/STR-1)がある。この基壇の調査の過程で、基壇の内部に古いイドロ期の建築が埋め込まれていることが明らかになった。

発見されたイドロ期の建築の一つは、幅 10.6 m、奥行き 7.5 m 以上、高さ 1.75 m の、現存部分では長方形の基壇建造物(ID/STR-1)である。奥行きの部分はクントゥル・ワシ期の中央基壇を支える土留壁を築くときに破壊されてしまい、全体の形状と大きさがわからなくなっている。ID/

STR-1の基壇の前面(北東壁)には、高さ50cm、奥行き90cmほどの段が張り付いており、その先で壁が1.25mの高さで立つ。この壁の中央には幅2.6mにわたって切れ目があり、入口のように開いている。ここから入ると部屋のような空間がある。幅9m、奥行き2.9m、床と壁の全面が白土で上塗りされていた。部屋の正面奥は高さ75cmの壁になっていて、その先は一段高くなっている。基壇の土留壁は石を積んだ後、表面に20cmほどに厚く土を上塗りし、その上に白土を塗って仕上げとしていた。この基壇の上の部屋状の空間の床に4基の墓(第1号墓から第4号墓まで)が発見された。

クントゥル・ワシ期の中央基壇内部には、さらにもうひとつの低い基壇が埋め込まれていた。これもイドロ期のもの(ID/STR-2)で、ID/STR-1の北西4mのところにあった。高さは40cmと低く、確認された部分は幅4m、奥行き6mで、残りの部分はクントゥル・ワシ期の中央基壇建設の際に壊されてしまっていた。この低い基壇の上には3m四方の部屋がふたつつながっていて、北東側の部屋の床中央に第5号墓が掘り込まれていた。

イドロ期の高い方の基壇(ID/STR-1)前面から北東の方には、白土を固く敷き詰めた床の広場が広がっていた。そしてこの白床にも墓壇がふたつ見出された。すなわち第7号墓と第9号墓である。いずれも後代において掘り返されており、内部には人骨が散乱していた。墓壇の輪郭を確認し、わずかに残されていた副葬品の一部を収集するにとどまった。なお両者とも、朱の跡を残していた。

クントゥル・ワシ期の中央基壇(KW/STR-1)は床面積390平方メートル(24.8×15.7m)、高さ1.5mで、イドロ期の広場との比高は2mあり、基壇を作るにはおよそ800立方メートル分の土と石を積み上げたことになる。実際には、イドロ期の建物の基壇を埋め込んでいるので、800立方メートルより幾分か少なくてよかったはずである。その埋め方は、土と石を交互に水平に敷き詰めてゆく規則的なものであった。まずイドロ期の広場の床を土で覆い、その上に石を敷き詰めた。こうして低い基壇(ID/

STR-2)の高さまでが埋められると、つぎに再び土と石を積み、高い方の基壇(ID/STR-1)の部屋状の空間の床面の高さまでを埋める。この上にまた土、石、土の順に積み、中央基壇を完成させた。ただし、イドロ期の建築のうち北西部と南西部は、中央基壇の土留壁建設の際に破壊されており、中央基壇がイドロ期の建築全てを包み込んでいるということではない。イドロ期の建築とクントゥル・ワシ期の中央基壇とは、北東-南西という中心軸の方向は一致するものの、その位置に2 mほどのずれがある。おそらく両時期のあいだには建築プランに相違があり、そのことはまた祭祀自体の違いを意味していると考えられる。クントゥル・ワシ期の建築プラン変更は、中央基壇ばかりでなく、頂上マウンド全体に及んでおり、さらに下方のテラスまでも含んでいた。

ここに問題としている一連の墓はまさにこの大建設工事のはじめに作られたものである。第1号墓から第5号墓まで、そして第7号墓と第9号墓は、すべて、イドロ期の白土の床面を壊して作られている。墓壇には蓋がなく、また白土を塗り直した形跡もない。その上に堆積する土と石の互層(すなわちクントゥル・ワシ期中央基壇の埋め土)には乱れがない。したがって、墓壇を掘り、埋葬を済ませ、墓壇を埋めたのは、イドロ期の基壇が機能した後、クントゥル・ワシ期中央基壇の完成の前ということになる。また、第1号墓から第4号墓までの4基の墓は、近接して並んでおり、深さもほぼ等しく、ほとんど同時に作られたものと考えざるを得ない。そうであるならば、これらの墓への埋葬は、中央基壇さらには祭祀建築全体を建立する際の一つの過程として、あるいはそのような大規模な造営にあたって執り行われた一つの儀礼行為とも解することができる。人骨、副葬品などの詳しい分析と比較研究がこのことにある種の見通しを与えてくれるであろう。

第1号墓から第4号墓までの4基の墓は次のようにして確認された。まずクントゥル・ワシ期の中央基壇(KW/STR-1)の床下を掘り進め、下層のイドロ期の基壇(ID/STR-1)に設けられた部屋状空間の調査を行っ

た。その内部に互層状態で詰まった土と石を除くと、全面に白い土を敷き詰めた床が現れた。この床面に直径 1.5 m ほどの円形の輪郭をなす赤い土の存在が認められた。明らかに白床を掘り込んで穴をあけ、その後で赤い土を詰めて穴を塞いだことを示している。こうして、赤い土を除去する作業をしたところ、穴の底から墓が発見されたのである。

詰められていた赤土は独特のものであり、ある程度までは穴の壁面をなす土との区別が容易であった。掘り下げた穴の壁面の観察から白床の下の堆積状況を知ることができる。床下 15 cm の深さで、白土を敷いたもう一枚の床の存在が確かめられた。イドロ期においては床の張り替えが行われていたことがわかる。その下 40 cm-50 cm の深さになると赤褐色の硬い土となる。これは岩盤の土であり、岩盤をも深く掘り込んだ後に、掘り上げた岩盤の土を穴に埋め戻したわけである。したがって穴が岩盤層の中へ掘り込んであるところでは、埋め土と岩盤との区別がつけにくくなる。しかしながら、土の硬さと粒子の肌理の状態から辛うじてその区別が可能で、赤土をすべて掘り上げてみると、穴は白床から円筒状をなして 2 m 以上の深さになっていた。穴の底には横穴部分があり、それと筒状の竪坑との境には石を積んで粗末な壁が築かれていた。この壁の奥の横穴に詰まっていた石と土を除去すると、穴の底に埋葬が認められた。

こうして、4基の墓の作り方が明らかになった。すなわち、まずイドロ期の基壇の白床から竪坑を下層の岩盤にまで掘り込む。その後、横穴を掘り墓室を準備し、埋葬の後、石を積んで墓室を閉じる。最後に、掘り出した土で竪坑を完全に埋める。

4基の墓は、同じ建物の床下にはほとんど同時に作られたとはいえ、墓間の距離は均等ではない。第1号墓と第4号墓との間隔はわずかに 20 cm であり、一方第2号墓と第3号墓の間隔も 15 cm と狭くなっている。これに対して、第1号墓と第2号墓とは 135 cm とやや広く間隔をあけている。この間隔の違いに何か意味があるかどうか、今後の検討を待ちたい。

次に、各墓の内容を記述する。第1号墓から第4号墓までの構造は表1

の通りである。

第1号墓

遺体は、もともと立て膝に曲げた足を両手で抱えたような形の座位屈葬で、北もしくは北東を向いて安置されたと見えるが、発見時には右側に横倒しになっていた。被葬者は壮年から老年の男性らしい。

頭骨の後方につぶれた状態で金の冠が発見された。冠は、46.5×18 cmの長方形の薄い金の板を丸く曲げたもので、頭に固定するための紐を通す小孔が左右の端にそれぞれ3箇所ずつあいている。2段それぞれ7つの6角形の切抜き部分があり、そこには、金製の人面が14個、2本の金のリングで吊り下げられていた（『十四人面金冠』）。

さらに頭骨の近くには3点の土器があった。頭骨に接するような状態で無彩色の高杯、ややはなれて赤色鍍型壺があり、頭骨と金冠の間には、圈点模様と刺突文のある赤色長頸壺があった。赤色鍍型壺は全体が鳥（ワシのような猛禽類）を形象しており、とくに顔の部分は刻線による曲線模様が描かれている。遺体が横に倒れる前では、これらの土器は遺体の右手1 m弱離れた位置にまとめて置かれていたことになる。

足の骨の手前には、3つの大きなほら貝（ストロンブス貝）があった。そのうちまん中のものは、擬人的な横顔を主にした複雑な図像が刻線で描かれていた。これらの貝製品は、もともとは遺体の正面に置かれていたことになる。

横倒しになった体の胸のあたりから、1対の青い石でできた耳輪と、2点の貝製管玉（耳飾り）、中央に丸い孔をあげ、縁の方にはコンドルの頭部を彫刻した貝製装身具（ペンダント）、平板状の貝製ペンダント、小さな金のリングなどが発見された。ペンダントの貝はストロンブスかと思われるが、ストロンブスと耳輪の青い石は、他の墓からは出土していない、第1号墓の特色といつてよい。

遺骸およびその周囲の土にはかなりの量の赤色顔料（朱すなわち硫化水銀とみえる）が付着していた。とくに頭部付近に朱が濃厚であった。

第2号墓

骨の保存状態が極めて悪く、いまのところ性別、年齢の判定ができていない。金の冠が立った状態で発見され、その内部に頭骨の破片がみつかった。かぶっていた冠が顔の前にずり落ちたかのである。冠は、48×13.5 cmの長方形の金の板で、押し型で浮き出しにされたジャガーの顔が横1列に表現されている。中央に正面像、その左右にまったく同じジャガーの顔の倒立像、両端にはそれぞれ左右半分ずつのジャガーの顔が横顔として表現される（『五面ジャガー金冠』）。冠の周囲、内部の頭骨片に朱が濃い。

冠の下には4枚の板状の金製胸飾りが、いずれも裏返しに重なっていた。このことから座位の上半身が崩れて、胸に下げられていた飾りが重なり落ち、その上へ冠を付けたままの頭部がずり落ちたと推定される。冠および胸飾りの位置からすると、遺体はもともと北東を向いていたと考えられる。

一番上にあった胸飾りは、2枚の長方形の板（18×9.5 cm）で、上端中央に小孔があいていて紐が通せるようになっている。板の浮き出し模様では、上向きと下向きのジャガーの横顔と鋭い爪を強調した腕が表現されている。2つの顔は帯のようなものでつながっており、中央で点対称の関係にある（『横顔ジャガー飾り板』）。

この2枚の飾り板の下にはH字型の金の胸飾りがあった（17.5×16 cm）。上端中央に紐のための小孔が2つあいている。打ち出されている図像はかなり複雑で、上半分にジャガーの顔（正面とも見えると同時に、横顔を突き合わせたようにも見える）、下半分が大きな口を開けた顔の正面となっている。右目は四角、左目は丸くその周囲を蛇の尾が巻いている。大口は上顎だけで下顎がなく、また牙もない。H字の4つの端には猛禽の横顔が打ち出されている（『蛇目一角目／ジャガー胸飾り』）。

一番下から見つかった金製の胸飾りは最も精巧な凶像表現を持つものであった(16.5×11 cm)。中心をなすのは正面を向いたジャガー的な怪獣の顔で、極端にねじ曲がった口からは鋭い牙が伸びている。顔の両側から鋭い爪のある手と足が出ており、手は赤子のような小さな人物の背中をつかんでいる。小動物を表した小さな飾り板が縁を飾っている(『双子／ジャガー胸飾り』)。

遺骸の前方やや離れたところに刻線模様の把手つきカップ、右後方にジャガーの顔を刻線などで描いた黒色の壺が置かれていた。不思議なことにこの黒色壺は、破片の数が少なく、出土した全破片をつなげても、1個の壺を完成させることができない。すでに壊れて、口縁部がなくなっていた壺を副葬したとしか見えないのである。そのほか、緑色の石の管玉(おそらく耳飾り)が3点出土した。

また、冠の左下端で小片が切り離されていたこと、『双子／ジャガー胸飾り』ではジャガーの左足の部分が切り取られて、紛失してしまっていた。墓そのものは完全に密閉され、後代の攪乱の跡は認められないので、これらの欠損は埋葬時にすでに生じていたものとせざるを得ない。その意味については不明ながら、二次埋葬もまた一つの可能性として考えられる。

第3号墓

骨の保存はよくなかったが、頭骨の形が残っており、形状と歯の特徴から、比較的若い男性と推測される。西向きの座位屈葬であったものが左側に横転したらしい。頭骨周辺に朱が濃く認められた。頭骨の両側、耳の部位に、金の耳輪と石製管玉1個(白と緑の色)が対になって見出された。耳輪の大きさは、最大径7 cm、長さ3.5 cmであった。遺体の右手前方には、無彩色の高杯型土器、その手前に黒色刻文の鍔型壺が置かれてあった。

第4号墓

横穴の入口の左側に足の骨が見つかり、それとはかなり離れて奥の方に下向きになった頭骨が発見された。もともとは入口近くに南向きの座位屈葬で安置されていたが、入口を塞ぐ石積みの一部が崩れて上半身を倒して奥の方へ押しやったものらしい。被葬者は老年の女性である。頭部付近に朱が多い。

墓室は北から南の方へ掘り込まれていて、第1号墓の場合と同じであるが、遺体の向きは正反対である。すなわち、他の3基の墓と違って、遺体は奥の方を向いていたのである。墓壇の深さも異なり、他の3基よりも幾分か浅い。

頸骨の周囲から胸部にかけておびただしい量の管玉や丸玉が発見された。これらの玉類は散乱もしていたが、多くは規則的に並んでおり、ある程度原形を保っていた。玉は、少なくとも3種類の石と2種類の貝を加工したもので、大きさと形状からすると20種類に分類できる。出土状況からすると、輪状につないだ幾連かの首飾りと、小玉をつなぎあわせて胸にかけた垂れ飾りという構成になっていたようである。玉の総点数は約7,000点、重量はおよそ2.5 kgにもなる。

このほかに、胸の飾りの中に、円錐形の金のペンダント1点、鳥を象った金と銀の小さな垂れ飾り21点があった。

人面を象った小さな石製容器も発見された。

遺骸の右側にやや離れて黒色の鍔型壺が置かれ、さらにその近くに2点の鉢もあった。1つは赤の彩文のある鉢、もう1つは黒色の無文の鉢である。

第5号墓

第5号墓はイドロ期の低い基壇(ID/STR-2)の上にあった小部屋の床

面に掘り込んだ墓である。墓壇は隅丸長方形(110×70 cm)を呈し、深さは70 cmほどで、かなり浅い。埋葬されていたのは壮年の男性で、膝を抱え、背を丸めた姿勢でそのまま仰向けになった状態で発見された。頭部は穴の南東の方に位置し、腰が北西の方にあった。頭骨の下、肋骨の上に、鹿の角を適当な長さに切断して作ったらしい管玉が7点、白い貝製の管玉が20点、見つかった。配置からみて、2連のべつべつの首飾りであろう。また、動物の骨で作った極めて薄い有孔円盤(直径9.6 cm)と、銅製の有孔円盤2点(直径7.4 cm)が出土した。対称の位置に小さな孔があいていて、紐を通して首から吊るしたものかもしれない。銅製円盤の内1点は砕けて破片になっていたが、他の1点は完全な形を保ち、酸化した表面には布の一部が付着したままになっていた。

この第5号墓は、層位関係からして、イドロ期の墓壇が放棄された後で、しかもクントゥル・ワシ期の中央墓壇が建設される前に作られており、第1号墓から第4号墓までの4基と同時期であるといつてよい。しかし、墓の構造、埋葬方法、そして何よりも副葬品と朱が撒かれていない点で、独特である。

第7号墓と第9号墓

これら2つの墓は、イドロ期の高い墓壇(ID/STR-1)の前面すなわち北東側にある広場で見出された。墓壇は白土を固く敷き詰めた広場の床面を円形に掘って作ってあった。しかしながら後代になって、広場を埋めた土の層と共に掘り返されており、本来どこから掘られた墓なのか、埋葬された人物や副葬品などについても詳しく知ることができない。第9号墓はイドロ期墓壇の中央やや北西寄り、壁から1 mほどはなれたところがあり、直径2.2 mのかなり大きな穴である。内部には散乱した人骨破片と数点の土器片が残されていたにすぎない。第7号墓は、墓壇の北隅の壁際にある直径2 mの穴で、人骨のほか、金製品の破片と数点の石製および貝

製の玉、筒状の骨製品が出土した。両方の墓壙には朱の痕跡が認められた。遺物の特徴、朱の存在、イドロ期の床を掘った穴等の点で、これまでの5基の墓と共通点があり、やはりクントゥル・ワン期の墓と見てよからう。

墓の意義

クントゥル・ワンは形成期の大祭祀建築遺跡である。以前から研究者の間では注目されていた遺跡であるにもかかわらず、1946年の調査の簡単な報告(Carrión Cachot 1948)がある以外は、本格的な発掘がなされていなかった。したがってわれわれの3度にわたる発掘によってはじめて実態が明らかにされるといっても過言ではない。それによって形成期における祭祀主義の具体的な展開について重要な事実が目の目を見ることになるであろう。とくに、ここに報告した墓と副葬品の発見の意義は大きい。墓は祭祀建築の中心において発見されたのであり、単なる埋葬ではなく、祭祀と密接に関連した特殊な儀礼行為の一環と考えられるからである。

形成期の祭祀主義の意味論的側面を考察するにあたっては、主として3つの手がかりがある。第一に、祭祀建築自体の構造、第二に、その祭祀建築に付随する壁画、レリーフ、石彫などの図像表現、そして第三に、土器、織物、石や貝、骨などで製作された小型の彫刻品、金製品などに見られる図像表現である。量からいえば圧倒的に第三の資料が多い。ところが、これら「持ち運びのできる」図像資料は、その性質上、本来置かれていた位置からたやすく動いてしまう。そのため祭祀建築との具体的な関係を見出すことが極めて困難である。祭祀建築やそれに伴う図像表現の方は、研究者の手で発掘調査がなされてはじめて明らかにされるのに対して、「持ち運びのできる」遺物は偶然に掘り出されたり、盗掘されたものが多く、出土状況の記録がほとんどない。これら本来祭祀に関係していた品物は、祭祀建築の中の特殊な場所に収納されていることもある。たとえば、形成期の代表的な祭祀遺跡であるチャビン・デ・ワンタルの調査で、「奉納の回廊」

と命名された地下の部屋から数百点もの精製土器が発見されたことがある (Lumbreras 1989)。しかし、これはいまところ例外といってよい発見である。盗掘された墓の副葬品が、博物館の収藏品や個人コレクションとしてわれわれの前にあることが多いのである。今回のクントゥル・ワシのように、建築との関係や出土状況が正確に把握された形成期の墓は、その意味で極めて稀なこと、したがって実に貴重な発見といわざるを得ない。

形成期の祭祀建築と図像表現についての研究は何人かの研究者による試みがかれまでにあった (Rowe 1962 ; Roe 1974 ; Cordy-Collins 1976 ; Salazar-Burger and Burger 1983 ; Ravines 1984)。これらの議論とクントゥル・ワシのデータとがどのようにかみあうのか、これも今後の重要課題である。

また、クントゥル・ワシ期の墓の土器や金製品は、ヘケテペケ川下流域や北海岸に分布するクピスニケと総称される様式に類似している (Lapiner 1976 ; Banco de Crédito 1981 ; Alva 1986 参照)。それは、ほとんどが明確な出土状況の記録を欠いた遺物をもとにしている様式概念であるので、比較研究をするにも限界がある。今後の海岸地方での研究の成果が待たれる。

クピスニケ様式についてはその放射性炭素年代が多くの場合イドロ期よりも古い年代となっている。ところがクントゥル・ワシの発掘では、クピスニケ様式と酷似する土器などを伴うクントゥル・ワシ期は、明らかにイドロ期よりも新しい。クントゥル・ワシ発掘によって入手した試料の年代測定の結果がまだ出ていないので、議論ができないのであるが、結果次第では海岸から山地にかけての形成期諸文化の動向は、重大な再検討が要求されるかもしれない。

遺物の分析と比較研究、年代測定などの結果がまだ出ていない段階であるが、クントゥル・ワシの墓の重要性のゆえに、とりあえず事実を同学の諸氏に報告すべく、小論を発表する次第である。

追記 謝辞

クントゥル・ワンの発掘調査は文部省科学研究費補助金（海外調査 昭和63・平成1, 2）により実施した。現地において1989・1990年の2回の調査にはペルー三井物産からの資金援助も受けた。また、副葬品の予備的分析、写真撮影、実測の作業に対しては、三菱財団からの研究助成金（平成2年度）が充てられた。関係者各位に深甚の謝意を表す。また、ペルー国文化庁はじめ関係者ならびにプエブロ・ヌエボの村人の方々にもさまざまなご助力に対し深く感謝するしだいである。

参考文献

- Alva Alva, Walter
1986 *Cerámica Temprana en el Valle de Jaquetepeque, Norte del Perú*.
Materialen zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie. Band
32, Verlag C. H. Beck, München.
- Banco de Crédito ed.
1981 *Culturas Precolombinas. Chavín : Formativo*. Colección Arte y
Tesoros del Perú, creada y dirigida por José Antonio de Lavalle y
Werner Lang, Lima : Banco de Crédito.
- Carrión Cachot, R.
1948 La cultura Chavín. Dos Nuevas Colonias : Kuntur Wasi y Ancón.
Revista del Museo Nacional de Antropología y Arqueología. 2 : 123-72
- Cordy-Collins, Alana
1976 *An Iconographic Study of Chavín Textiles from the South Coast of
Peru : The Discovery of a Pre-Columbian Catechism*. Unpublished Ph
D dissertation, Univ. of California, Los Angeles.
- Lapiner, Alan C.
1976 *Pre-Columbian Art of South America*. New York : Harry N.
Abrams.
- Lumbreras, Luis Guillermo
1989 *Chavín de Huántar : en el Nacimiento de la Civilización Andina*.
Instituto Andino de Estudios Arqueológicos, Lima.
- Ravines, Rogger
1984 Sobre la formación de Chavín : imágenes y símbolos. *Boletín de*

Lima. Año 6, No. 35 : 27-45.

Roe, Peter Guy

1974 *A Further Exploration of the Rowe Chavin Seriation and Its Implications for North Central Coast Chronology*. Dumbarton Oaks, Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology. no. 13.

Rowe, John Howland

1962 *Chavin Art : An Inquiry into its Form and Meaning*. New York : Museum of Primitive Art.

Salazar-Burger, Lucy and Richard L. Burger

1983 La araña en la iconografía del Horizonte Temprano en la costa norte del Perú. *Beiträge zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie*. 4 : 213-53, Kommission für Allgemeine und Vergleichende Archäologie des Deutschen Archäologischen Instituts, Bonn.

	堅 坑		墓 室				
	直 径	深 さ	方 向	入口幅	奥 行	高 さ	深さ(*)
第1号墓	150cm	226cm	北→南	120cm	120cm	100cm	30cm
第2号墓	150cm	255cm	北東→南西	120cm	110cm	100cm	10cm
第3号墓	145cm	230cm	西→東	130cm	100cm	50cm	25cm
第4号墓	140cm	170cm	北→南	90cm	100cm	100cm	30cm

表1 クントゥル・ワシ4基の墓の構造

(*) 堅坑の底との比高

表2 クントゥル・ワジ第1号-第5号墓出土品一覧

	第1号墓	第2号墓	第3号墓
被葬者	壮年男子?	不明 (不完全)	若年男子?
金製品	冠(46.5×18cm) 篋目二段, 14人面 輪状薄板(径0.7cm)	冠(48×13.5cm) 5面ジャガー 胸飾り(17.5×16cm) 蛇目=四角ジャガー 胸飾り(16.5×11cm) 正面ジャガー 胸飾り(18×9.5cm) 1対 横顔ジャガー-2×2	耳飾り(径7cm, 高3.5cm) 1対 図象なし
土器	鍔型象形壺 赤/白:コンドル 長頸壺 赤:4(5)圈点 高杯 褐色 無文	ジョッキ型土器 黒:刻文 赤/白充填 無文壺破片 黒	鍔型象形壺 黒:刻文 チリモヤ 高杯 褐色 無文
石製品	菅玉(白/青)2点 耳飾り(径4cm, 高1.5cm) 1対 青色 無文	菅玉(緑)3点	菅玉(白/緑)2点
貝製品(I)	胸飾り(11.5×8×0.8cm) 白/青色 変形有孔石坂 輪(8.5×6×1cm) 白/青色 コンドルの目		
貝製品(II)	ストロンプス(ほら貝) (21×17×13cm) 白 彫刻文		
	ストロンプス(ほら貝) (21×18×12cm) 白 無文		
	ストロンプス(ほら貝) (19×14×11cm) 白 無文		

	第 4 号 墓	第 5 号 墓
被 葬 者	老年女性	壮年男子 幼児骨若干
金 製 品	金製銀製鳥型首飾り 21個体分 内完形 3点	銅製ドーナツ型円盤 2点 内 1点完形
そ の 他	2.4×1.2cm 0.25g	dia7.4cm ; 3.0cm 布痕と緑青付着
金 属 品	金製円錐形ペンダント 2.2 (dia)×3.5 (h) cm 23g	
土 器	黒色鎗形壺 1点 赤彩色鉢 1点 無文小型鉢 1点	土器なし
石 製 品	人面小型鉢 1点 dia 4 cm h4.5cm ビーズ* long×dia 点数 緑色菅玉 2×1.2cm 52 1.5×0.8 82 1×0.7 31 鮮緑菅玉 4×1×1cm 3 緑色丸玉 1×1cm 103 0.8×0.8 369 0.4×0.7 539 0.3×0.6 410 ラビス菅玉 5×1.7 11 ラスリ 2.5×1.5 13 1.5×1 50 ラビス丸玉 2×1.5 78 0.5×0.7 244 灰青色平玉 1.5cm 101 微小玉 直径 0.5cm以下 3,672 青色獣面付菅玉 1 破片 286	石製品なし
貝 製 品	ビーズ* long×dia 点数 白色菅玉 1×1.6cm 13 0.8×0.8 23 Spondylus 玉 0.5×0.7 567 同上平玉 1.5cm 234	白色菅玉 20点 2×0.8×0.6cm Spondylus 玉 1点 0.7×0.7×0.7cm
骨 製 品	骨製品なし	骨製ドーナツ型円盤 1点 dia9.6cm ; 2.5cm 骨製菅玉 7点 4×2×1.7cm

*ビーズ総点数 6,882点

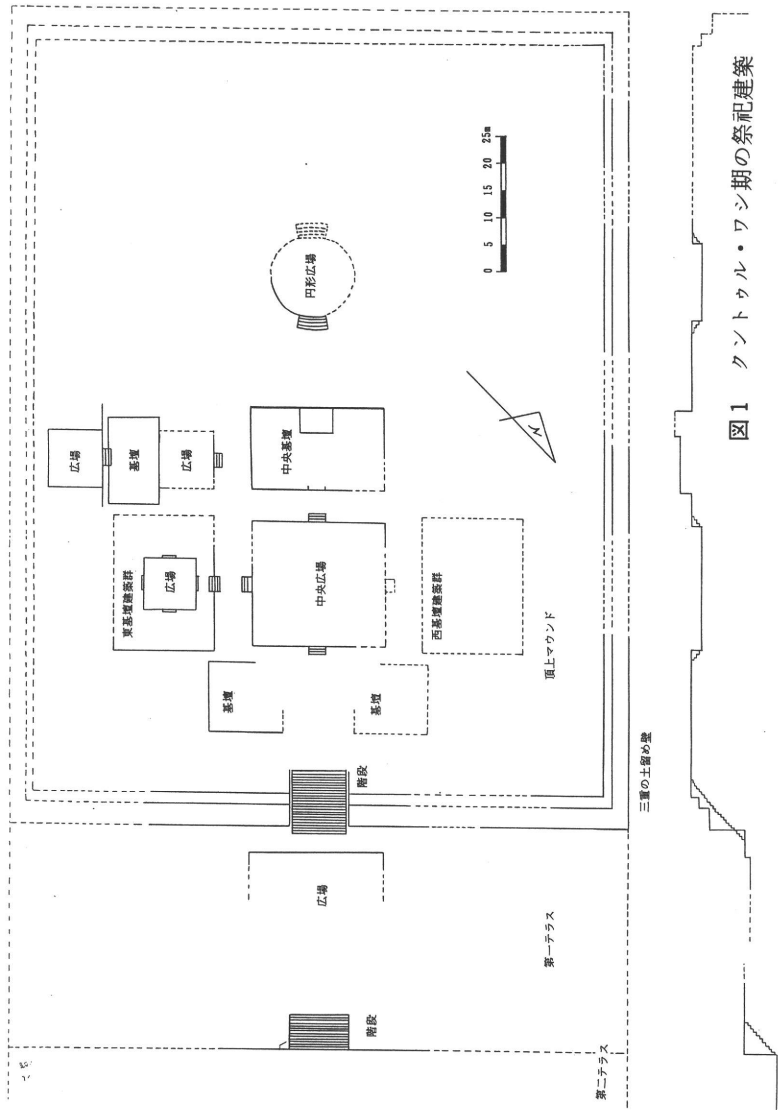


図1 クントゥル・ワシ期の祭祀建築

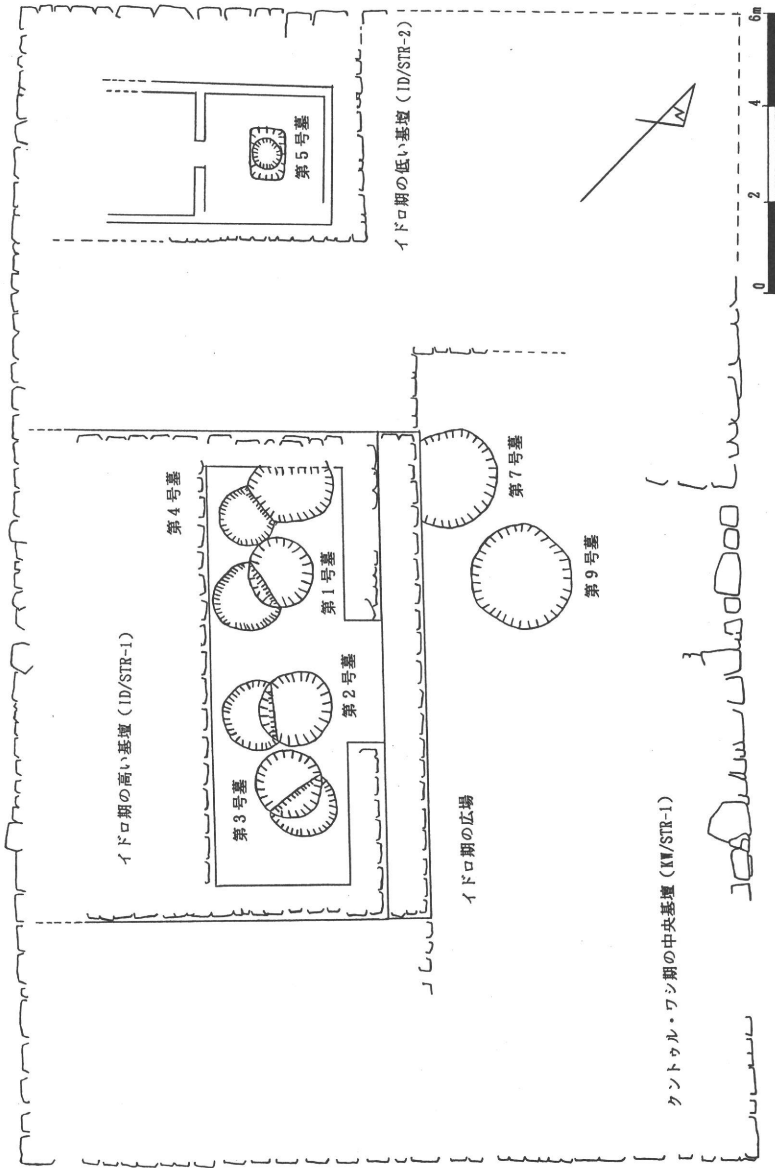
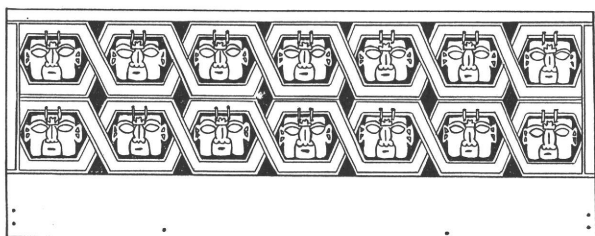
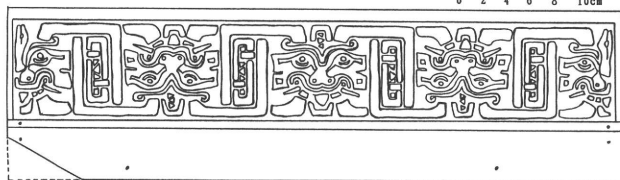


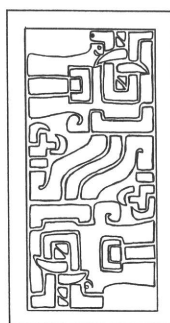
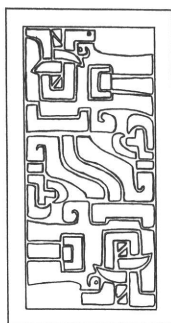
図2 A地区平面図：墓とクントゥル・ワシ期およびイドロ期の建築



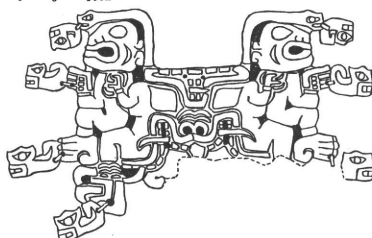
『十四人面金冠』(第1号墓出土)



『五面ジャガー金冠』(第2号墓出土)



『横顔ジャガー飾り板』(第2号墓出土)



『双子/ジャガー胸飾り』(第2号墓出土)

『蛇目一角目/ジャガー胸飾り』(第2号墓出土)

図3 クントゥル・ワシの黄金製品

